木村定三コレクションにおける富岡鉄斎作品の特質

柏木知子（清荒神清澄寺　鉄斎美術館）

はじめに

多岐にわたる木村定三コレクションのなかで、南画の作品群はコレクションを特徴づける大きな役割を果たしている。江戸南画を代表する与謝蕪村や浦上玉堂の名品をはじめ、近代南画においては木村定三がとりわけ高く評価した小川芋銭のコレクションは質量ともに充実をみせるものである。こうしたなかに、最後の文人と謳われる富岡鉄斎（1836～1924）の作品も含まれている。南画・文人画を研究蒐集するものにとって鉄斎は手にしたい画家の一人であるが、昭和12年（1937）、定三はコレクション形成に先駆けて、鉄斎の優品を入手する機会に恵まれた。それも鉄斎と深い親交を結んだ京都の老舗菓子屋虎屋から直接譲り受けたのである。現在でも虎屋では鉄斎画の「竹に虎図」「羅漢虎上図」が掛紙に使用され、また多くの鉄斎作品を収蔵することで知られているが、それではなぜ虎屋の所蔵品が名古屋の木村定三の手中に収まったのだろうか。

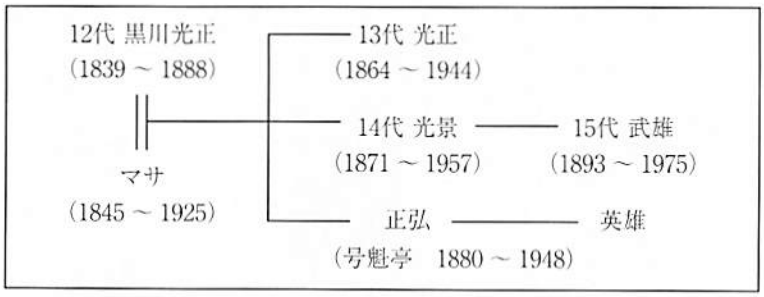
本稿では鉄斎と虎屋の関係を軸におきながら、木村定三コレクションの鉄斎作品について述べてゆこうと思う。なお虎屋については『虎屋の五世紀～伝統と革新の経営～』通史編（株式会社虎屋　2003）、木村定三とそのコレクションについては『木村定三コレクション名作選』（愛知県美術館　2008）などを参照した。また一部に、平成20年に虎屋文庫において開催された

「富岡鉄斎とその周辺」展に伴って行った調査と講演会[1]の成果を反映させた。

1．鉄斎と虎屋黒川家

鉄斎と老舗菓子屋虎屋との関係は、鉄斎が兄伝兵衛敬憲の死を機に和泉大鳥神社大宮司の職を辞して京都に帰り、明治15年(1881)３月に室町通一条下ル薬屋町に居を構えたことにはじまる。鉄斎が手に入れたのは煎茶道小川流の祖小川可進の旧宅で、後年隣家の画家横山華山の土地も買い入れ、地所は300坪ばかりになったという。京都御所の西側に位置し、今出川通を挟んで五山文学の中心地として栄えた相国寺があるこの地を鉄斎は気に入り、大正13年89歳で没するまでの43年を過ごした。一方室町時代創業の虎屋は、禁裏御用菓子屋を勤めることから江戸時代前期にはすでに室町一条に店を構えていたが、維新期の明治２年(1869)、天皇が東上するのに随行して東京に出張所を構え、明治12年には12代店主黒川光正が東京に出て店舗を開設した。虎屋にとっては激動する荒波に翻弄されつつも東京での基盤を築いていた時期であり、店主が東京に移った京都店は番頭が守っていた。そうした頃に、鉄斎は室町一条に越してきたのである。

現在確認されている鉄斎と虎屋の関係を示す最初の事跡は、



明治31年1月に描かれた《狂虎図》(虎屋蔵)である。款記に「為黒川氏　鉄斎外史写」、その共箱には「桃華坊黒川主人与余之居於隔僅数十足故朝夕往来　偶令余画之蓋主人有虎屋之号是所以有此嘱也　古語曰画虎類狗此画或然主人以為如何　明治三十一年戊歳一月　鉄斎外史并識」とあり、虎屋主人の依頼によってこの図が描かれたことが識されている。この主人というのは、おそらく明治16年に光正を襲名した13代店主のことで、光正は明治32年に弟の14代光景に家督を譲ると京都に移ってくるが、以前より東京と京都を往来し、隣家の鉄斎と親しく付き合っていたことが窺われる。同年8月には黒川家の懇請に応じて、鉄斎は同家の菩提寺である金戒光明寺を訪れ、午前八時より夕方六時の間に境内寺院の襖合計14枚を描きあげた。その一部である《香満十方図》(浄源院蔵)には「香満十方(香十方に満つ)」と大書した後に「為避暑之娯(避暑の娯しみと為す)」とし、墨の濃淡で表された大小の蓮は、暑さをしのぐために一気に描きあげた勢いがある。しかしこの大仕事に対して「其賄繪(かいさい)に酒一杯、一飯粗食のみ」が振舞われたことを鉄斎は筆録に書き記している。思うところはあったようだが、虎屋との親しさから成し遂げたのだろう。

明治37年に13代光正が一家で鹿児島へ転居すると、京都店は弟の黒川正弘(号魁亭　1880～1948)が昭和13年まで経営にあたることになる。正弘は虎屋の社史のうえでは京都店支配人という位置づけであるが、15代武雄が京都店を統合するまで東京店と京都店はそれぞれ別に経営を行っていたため、実質的には正弘が主人として京都店を切り盛りしていた。そしてこの正弘こそ、鉄斎と親交を結んだことで知られる虎屋主人なのである。

正弘が東京から京都に移ってきた頃の富岡家では、息謙蔵が

執事を務めており、書画の依頼者との交渉をはじめ面会者を制限するなどして、高齢の鉄斎が心置きなく学問や画業に専念できるよう気遣っていた。富岡謙蔵(号桃華　1873〜1918)は鉄斎が学校にも行かせず手許に置いて教育した自慢の息子で、明治41年からは京都帝国大学文科大学で講師の職を得て、支那金石学と宋代史の講義を受け持っていた。鉄斎は長寿であったので、この頃には昔馴染みはほとんどこの世を去り、替わって謙蔵の友人の長尾雨山、内藤湖南、狩野君山、小川琢治、山本竟山らが富岡家に出入りし、学問の友となった。辛亥革命後来日した中国の考証学者羅振玉とも謙蔵の縁で交流している。こうした御歴々に交じって、ほどなく正弘が鉄斎のもとに出入りするようになると、鉄斎は歴史ある菓子にちなんで《羅漢虎上図》《饅頭起元図》(虎屋蔵)を描いたり、また大正6年に帝室技芸員を拝命したのを受けて催した祝宴[2]には、慶長15年の北野大茶会に虎屋が調達したという菓子を古い記録から探して造らせるなどして[3]、虎屋の若き主人との交流を楽しんだ。

2.「拙者の愛弟子」—黒川正弘

大正7年12月23日、謙蔵が46歳で逝去した。83歳にして愛息を喪った鉄斎の悲しみは深かったが、家族を養うために老体をはげまし書画の制作につとめ、さらなる高みへと画境を昇華させていった。謙蔵亡き後の富岡家は、鉄斎と妻春子の老夫婦、そして謙蔵妻寿子と4人の孫たちだけの所帯になる。そこで何かと細やかな心配りをしたのが隣家の虎屋主人黒川正弘であった。鉄斎が正弘に宛てた書簡[4]が虎屋に遺されているが、これらからは二人の往来を具体的に知ることができる。鉄斎は用事があるときは気軽に正弘を自宅まで呼び寄せ、外出の折に

は随行あるいは代行を度々依頼している。季節ごとに友や書画の依頼者から富岡家に贈られてくる各地の名産品——堺の蒲鉾、播州の素麺、伊予の鰹節、尾道の鯛、西宮辰馬家からの酒糟、宝塚の清荒神からの松茸などは、届いたさきから正弘宅へ裾分けされた。一方正弘は鉄斎の勧めにより成し遂げた富士登頂や東京店への出張のたびに、謂れのある品と土産話を持ち帰り、老齢になり自由に出歩けなくなった鉄斎を喜ばせた。こうしたほかに両者の親交を語るうえでよく知られるのは、正弘が鉄斎の使いとして静岡興津の西園寺公望別邸に赴いた際に「拙者の愛弟子に御座候」と紹介したことであろう。弟子を持たなかった鉄斎が画をたしなむ程度の正弘を、最後の元老西園寺に「愛弟子」と言ったことからも可愛がりようが窺えよう。

さて大正11年、鉄斎は孫達も大きくなってきたこともあり、画室を新築する。この時、虎屋が店の離れと茶室を鉄斎の仮住まいとして提供したことは有名な話である。そして鉄斎が長年使用した旧画室と附属物の一切は正弘が貰い受け、自邸内に移築し茶室に改装した。こうした画壇の重鎮と老舗菓子屋の若き主人の交流は、京都において好奇と羨望の的であったようで度々新聞に取りあげられ、例えば同年9月の大阪毎日新聞には、次のような記事が掲載された。

鉄斎翁の旧画室　全部貰った虎屋の正弘クン

◇富岡鉄斎翁の新画室は目下建造中であるが旧画室の取壊しに就て面白いロマンスがある。或日の事耳の遠い翁は健かな老奥さんをお相手に旧画室の中でニコニコと機嫌よくして居られるところへ、御近所の虎屋の黒川正弘クンが御機嫌伺ひに来た。翁はイキナリ「黒川さん此画室を取壊す事になったが材木の遣場がない、あんた貰って呉れまいか」

と棚から虎屋の饅頭ぢゃなくて牡丹餅の落ちて来た様な訳。◇正弘クンは夢ではないかと耳たぶをつめって見ると痛い。「イヤ結構です、画でも画室でも頂けるものは皆頂きます」とその儘お受けして置くと、暫くして弥旧画室は取壊された。正弘クンは唯古い木材だけを貰う事だと思って居たら、其画室に附随して居た戸、障子、襖、畳などは勿論の事、床の間の画幅、額までもスックリ附けて進上の事となった。正弘クン夢に夢見る心地して翁の浮き世離れした態度に感激し、画室一切の物で記念の茶室を造り、年内に披露茶会をするといふ。（ルビ省略、句読点等筆者）

正弘クンと揶揄される決して愉快ではないこの記事を、正弘は菓子券とともに届けた。鉄斎はその切り抜きを丁寧に筆録に貼り「大正十一年九月毎日新聞ニ掲載　虎屋主人持参誠妙所記也　主人報之　之意乎菓子夥敷恵来　但菓子券ニテ進物ニ適用　価ニスレバ百金程　余書扁額易果房贈之」と書き添えている。正弘が旧画室の謝礼としたのは虎屋の菓子券で、これに対して鉄斎は「易果房」扁額を返礼として贈っている。鉄斎と正弘の間には、正規の金銭の授受や潤筆料が生じることはなかったのである。

易果房と名づけられた茶室は、翌12年5月15・16日の鉄斎翁米寿・夫人春子喜寿御祝茶会および虎屋茶寮開で披露された。京都の名士や新聞各社が招待された席には、床飾りから茶道具類に至るまで鉄斎作品が一堂に並び世間を驚かせた。というのも鉄斎は前年秋に持病の胆石で一部新聞紙上に危篤と報じられ、以来筆がとれないとの世評に反して多くの新作が会場を飾ったからである。招かれた記者たちは茶会の盛況や鉄斎の健在を報じつつも、作品価格を胸算用して、暗に虎屋主人の抜け

写真　売茶翁記念茶会（於萬福寺　大正13年６月15日）
前列左から鉄斎、一人おいて黒川正弘(魁亭)、高田採古堂、中島菊斎、
布施巻太郎、後列左端松葉儀平、右端四代秦蔵六

日のなさを言う記事が各紙を賑わした。

こうした好奇の目をよそに、鉄斎は正弘が企画した茶会を共に楽しみ、惜しみなく絵筆を揮った。正弘は鉄斎米寿茶会のほかに、大正10年10月には黒川マサ喜寿御祝茶会(於桜橘財団)、大正13年６月には売茶翁記念茶会(於萬福寺　写真)を催しており、その茶席や展観室は概ね鉄斎作品で構成されていた。趣向の異なった正弘主催の茶会は、鉄斎に新たな創作意欲をかきたたせ、最晩年の名作を創出するひとつの場になったことに違いない。鉄斎は好意を持った人のために描くことを喜びとしたが、どうしてこれほどの作品を正弘に遺したのだろうか。

さて鉄斎は、数万冊を数える愛蔵本に覚えや奥書を書入れたり、蔵書印を捺したりして楽しんでいた。これは自娯であると同時に、「こうしておけば子孫が困った時の売り代になる」と遠く子孫にまで思いを及ぼした行いであった[5]。同じような意味合いのことばを、鉄斎は正弘にも遺している。大正12年の正弘主催の鉄斎米寿茶会の案内状や会記、新聞記事を貼り込ん

だ《示家児巻》(虎屋蔵)という巻子がある。茶会の記念に正弘が作成したものだが、その題字に鉄斎は「貽厥孫謀(その孫に謀を貽す)」[6]と寄せている。すなわち「子孫代々のために計略をのこす」の意で、こうした語句からは鉄斎の正弘に対する想いが窺える。店主が東京に移った虎屋では、大正8年、14代光景と養子縁組し娘婿でもある武雄が15代店主となるべく第一銀行を退職して店に入った。武雄は明治44年に黒川家に入って間もない時分から東京店と京都店の経営を一本化することを主張しており、水面下で京都店譲渡の話を模索していた。そうした家の事情を耳にしたであろう鉄斎は、虎屋の家督相続人でない正弘の将来を案じて、作品というかたちの財産を遺したのである。鉄斎は亡き謙蔵と同世代の正弘を息子のように思っていたのだろう。

3．虎屋黒川正弘所蔵の鉄斎作品のゆくえ

大正13年12月31日、鉄斎は89歳で逝去した。大晦日のあわただしいなか巨星墜つとの知らせは、正弘によって周辺の人々にもたらされた。この時、嫡孫の益太郎はまだ数えの18歳で、富岡家にとって隣家の正弘は変わらず頼りにした存在であったようだ。正弘の所蔵品のうち、鉄斎による共箱が伴わないにもかかわらず、蓋裏などに鉄斎の所用印「銕斎外史」(図1)を備えるものが確認されている。この印は、おそらく富岡家から許可を得て正弘自身が捺していたのではないかと推察され、富岡家の正弘によせる信頼の証といえよう。そして正弘は自らの所蔵印「黒川正弘」印や号魁亭の「魁」印をそれらの箱に捺して、想い出の品々を愛しんでいた。

時代は大正から昭和に移り、昭和3年(1928)3月12日、京都

図1「銕斎外史」印

美術倶楽部において407点におよぶ鉄斎作品と遺愛品の売立が行われた。『故富岡鉄斎翁遺愛品虎屋黒川魁亭氏所蔵品入札目録』と題された目録は、一見正弘の単独開催のような印象を受けるが、実は富岡家と黒川正弘の両家による売立で、富岡家の台所事情が世間の目にさらされないようにとの配慮が窺われる。札元の福田浅次郎商店が作成した「富岡様分入札品原簿」(清荒神清澄寺蔵)には、この売立で落札に至った富岡家出品分123点の作品名と落札価格が詳細に記されており、「精算書」からは総計61,138円57銭のうち諸経費等を差し引いた47,244円28銭が富岡家に支払われたことがわかっている。大黒柱を失った富岡家では、次第に鉄斎の遺した作品や愛玩品、書籍などを売って生計をたてるようになってゆく。

一方、正弘がこの売立に出品したのは、屋号の虎を題材にした名品や、自らが企画した茶会で用いた掛幅道具類で、正弘にとっては何物にも代え難い鉄斎との想い出の品々であった。落札に至らなかった富岡家戻し分を見込んでも、おそらく半分以上は正弘出品分であったはずで、その落札総額も推し量れよう。いずれにしても、鉄斎の愛玩品や正弘との深い親交がもたらした作品群は市場に流れ、両家には現在の貨幣価値に換算すると数億円という金額が入ったのである。こうしたことは鉄斎が生存中から意図したことにせよ、没後わずか4年にしては展開が早すぎる感は否めない。しかし家族と正弘のために活かされるのであれば、鉄斎は得心したに違いないのである。この頃正弘は、やがて迎えくる転機と向きあっていた。

虎屋東京店の経営を実質的に武雄が行うようになると、いよいよ京都店の経営統合の話に現実味が帯びてきた。13代光正、14代光景の弟である正弘は、葛藤がありつつも虎屋繁栄のためには一本化は避けられないと解していたのだろう。京都店を

引いたあとの生活のために、名古屋への出店に動き出す。そして昭和11年(1936) 12月1日、京都店と東京店以外でははじめての店舗が松坂屋名古屋店内に開設され、その責任者には正弘の長男英雄が就いた。ちなみに、この出店に際しては東京の虎屋が全面的に援助したことが正弘と光景・武雄の間で交わされた書簡からわかっているという。鉄斎が正弘のために遺した遺産がいかに使われたかは、現在のところ明らかでない。

ところで正弘は、昭和3年の売立に所蔵品すべてを出品したわけではなかった。とりわけ想い出深い作品は手許に遺しておいたのである。しかし秘蔵していた作品も最終的には手放すことになったようで、そのうち《嘉定菓子図并説》[7]《羅漢虎上図》《饅頭起元図》などは東京の兄14代光景に譲られ今なお虎屋に伝わり、また《虎僊育虎子図》を含む数点は名古屋の著名な美術品収集家木村定三(1913～2003)の所蔵に帰することになった。

昭和12年5月、正弘は《虎僊育虎子図》の箱書に「大正三甲寅歳　鉄斎翁為我作此図爾来珍重秘蔵之処　依木村氏之懇望贈之　昭和十二歳五月　虎屋主黒川正弘誌之」とし、大正3年の寅年に鉄斎翁が私のために描いてくれて以来大切にし秘蔵してきたこの図を、木村氏のたっての願いにより贈ることを誌している。これにある木村氏とは木村定三のことで、前年の昭和11年、正弘が念願の名古屋出店を果たした年に、定三は東京大学帝国大学を卒業して家業に従事すべく郷里に帰っていた。数年来、出店にむけて店舗と菓子製造所の土地の選定をしていた正弘と、名古屋市内に多くの土地家屋を有する素封家の木村家のあいだに接点が生じても何ら不思議はなく、帰郷して兄定二の補佐を務めるようになった定三と正弘は面識を持つようになったのだろう。それにしても売立にも出品せずに秘蔵してき

図２　虎僊育虎子図

た作品を正弘が贈るからにはよほどの関係があったと推察されるが、その背景について箱書以上のことは語られていない。そして木村定三コレクションの鉄斎作品のうち入手経路が明らかなのは《虎僊育虎子図》のみで、ほかの作品については記録も遺されていない。

４．木村定三コレクションの鉄斎作品

それでは、黒川正弘旧蔵品を含む木村定三コレクションの鉄斎作品を見てゆくことにする。

《虎僊育虎子図》

鉄斎79歳の作になる《虎僊育虎子図》（図２）は、款記に「大正三甫歳四月為虎舗　鉄斎外史」とあり、大正３年寅年４月に虎舗すなわち虎屋のために鉄斎が描いたことが識されている。題字の「虎僊育虎子（虎僊、虎子を育む）」は、虎を御する仙人が子虎を養い育てることをいい、為書を虎屋主人ではなくわざわざ「虎舗」とすることから、おそらく虎は店舗、子虎は支店

を擬えるのであり、親虎にまたがる虎僊は虎屋主人である正弘と読み解くことができるだろう。

鉄斎は虎屋の屋号にちなんで虎の画を数多描いており『故富岡鉄斎翁遺愛品虎屋黒川魁亭氏所蔵品入札目録』には、猫のようなおかしみのある虎図が多く掲載されている。中国の故事逸話に取材する名作や吉祥図、時には正弘親子を表すと推察されるものも含まれているが、これらは昭和3年の売立に出品され、正弘の許を離れていった。そうしたなかで正弘は、本図を秘蔵の品として手許に遺した。鉄斎は虎屋の店舗および子孫の繁栄の意を込めて何かの記念にこの画を贈ったと思われるが、経営者として店の発展を願う正弘には特別な想い出があったのだろう。昭和11年、正弘は名古屋に店舗を出店し、長男英雄を責任者とするが、この画が制作されてから22年の歳月が流れていた。

図3　寄国祝歌

《寄国祝歌》《暁山雲図》《遠山雪景図茶碗》

鉄斎は毎年、勅題にちなんで和歌や書画を制作することを恒例としており、木村コレクションのなかにもそうした作品が含まれている。

大正5年の勅題「寄国祝」に詠んだ和歌「千嶋よりたかさごかけて民草のいやさかえゆく今の大御代」を短冊にしたためた《寄国祝歌》(81歳　図3)。共箱蓋裏には謹んで「正七位富岡百錬　時年八十一」と位階と戸籍上の名である百錬が記されている。これに備わる紙外箱に「魁」印が捺されることから、黒川正弘の旧蔵品であることがわかっている。

大正12年の「暁山雲」に応じて描かれた《暁山雲図》(88歳　図4)は、鉄斎米寿の優品である。雲間に浮かぶ富士山頂が暁の光でかすかに染まりゆく図で、画面上方には「大正十二年

図4　暁山雲図

一月　和歌勅題暁山雲　八十有八叟　鉄斎百錬画」の賛が寄せられる。国の象徴である富士山と元旦に国家国民の安康豊作を祈って拝する初日の組み合わせは、勤皇家鉄斎がその意を表すのに適した題材であったのだろう。大正８年の「朝晴雪」には、雪をかぶった富士山頂上に朱色の旭が光り耀く《不尽山頂上図》(84歳　ボストン美術館蔵)、大正10年の「社頭暁」には、浅間神社を裾野に配し、ほのかに暁に染まる富士全景を描く《社頭暁景図》(86歳　清荒神清澄寺蔵)が名作として知られている。

また大正６年には、雪をかぶった富士山を鳥居越しに望む図を茶碗に絵付けした《遠山雪景図茶碗》(82歳　図５)が制作された。共箱には「大正六年一月　写宸題遠山雪之意　作之者春姥画及加題簽者鉄斎　時年八十二」とあり、この作が勅題「遠山雪」の意を写すもので、春子が造った茶碗に鉄斎が画と題字を加えたことが識されている。鉄斎が新年にあたって勅題にちなむ作品制作を習慣としたのは、妻春子が毎年和歌を詠進していたからであった。春子は結婚を機に鉄斎が若い時に薫陶を受けた大田垣蓮月(1791～1875)と親交を結び、手ほどきをうけた和歌や手すさびの陶芸に生涯親しんだ。妻が作った和歌や陶器に鉄斎が画を添える合作は、鉄斎が60歳頃から盛んに見られるようになり、80歳を越えると折にふれ夫婦で楽しみ、世話

図５　遠山雪景図茶碗

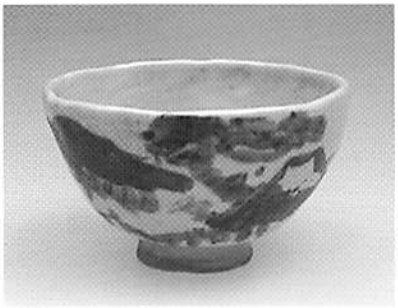


図６　富士山図茶碗

図７　菊図急須

図８　百事如意図

になった人に記念の品として贈っていたようだ。《富士山図茶碗》（図６）や《菊図急須》（図７）は、春子のぽってりとした厚い作行きに合わせて鉄斎が絵付けをするもので、素朴な味わいのほほえましい作である。

《百事如意図》

鼎に松と梅をたて、その前に百合根、柿、橙、霊芝を配する《百事如意図》（83歳　図８）。それぞれの図様には寓される意味があり、松は不老長寿、梅は安産と子孫繁栄、橙は代々繁栄を象徴する。また百合根の「百」は数字の極まりで多いこと、柿は「事」の通音、霊芝はその形から「如意」を表し、以て「百事如意」の語呂合わせとなる謎語画題である。そして鼎中央に大字で書された「百事如意（百事、意の如し）」はすべて願いどおりになる意、同じく鼎中央に鼎の装飾文様のように捺された「子孫千万」印は子孫が永く栄えることをいい、ともに吉祥語である。総じて中国古来の吉祥尽くしで構成されるもので、鉄斎はこうした吉祥図を多く描いている。

さて、本図には吉祥画題に相乗する要素として、雅致に富んだ肖形印（図像印）が捺されている。一つは先の「子孫千万」印で、漢の瓦を模刻した径14センチにもなる大印である。その大きさゆえに用例は少なく、本図は貴重な作例の一つといえよう。もう一つは画面右下の押脚印で、竹の生い茂る東屋に隠士が寓居する図に「君子居之何陋之有（君子これに居る、何の陋しきことかこれ有らん）・鉄斐」の印文が刻されている。双方ともに鉄斎自らが制作に係わった印であることが、自刻印ばかりを集めた印譜《印癖巻》（88歳　清荒神清澄寺蔵）に載ることからわかっている。鉄斎は若い頃には篆刻家を志したが、その技量はおおよそ余技の域をでるものではなかった。しかし約

図９　大国大神神影

図10　大黒天像　清荒神清澄寺蔵

60年に亘って生み出された万余の作品には、その画題や画風に応じて500を越える用印のなかから捺すべき印を巧みに選出し、常々「余に印癖あり」と語って誇りとしていた。彩色を施した《百事如意図》には、自らが方寸のなかに表現した形象を捺すことで、吉祥図をさらに華やかに彩ったのであろう。

《大国大神神影》

大正13年(1924)の１月１日、鉄斎は60年に一度の甲子年を祝して《大国大神神影》(89歳　図９)を描いた。頭巾をかぶり、左肩に袋を背負い、右手に小槌を持つ大国主像は、その賛に「経営国土　扶殖人倫(国土を経営し、人倫を扶殖す)」とある。60周期に一度訪れる甲子は、干支の組み合わせの一番はじめにあたるので大吉とされる。鉄斎は甲子年あるいは甲子日に機縁して大国主像を描いており、多くの作例が遺されている。時々によってバリエーションをみせるが、紺紙金泥で描か

れた《大国大神神影》と同様の作品としては、賛を同じくする車折神社車軒文庫本[8]、賛の異なる清荒神清澄寺本[9]があり、ともに大正9年9月の甲子日に制作されている。おそらく最初に描かれたのは等身の均衡が保たれ筆致も丁寧な車折神社車軒文庫本で、多少デフォルメされた清荒神清澄寺本はこれに続くと思われる。そして大正13年甲子年に至っては、等身のバランスも筆致も車折神社車軒文庫本からはかなりの飛躍を見せている。

実はこれらは絵手本を同じくし、鉄斎が若年の頃画法を学んだ小田海僊(1785～1862)筆の紺紙極彩色「大黒天之像」が典拠になったことが、鉄斎の粉本《大黒天像》(清荒神清澄寺蔵 図10)からわかっている。鉄斎は師の大黒天像を摸写するだけではなく、海僊が賛にいうところの日本において大黒天と神道の神である大国主命と習合される俗説を正し、自らの見識を書き記して「我国人、国典ニ暗キヨリ異邦ノ混淆ノ図夥シ」と締めくくっている[10]。そこには画家としての姿勢のみならず、対象について書物を紐解き徹底的に考証する学者鉄斎の姿勢を窺うことができる。しかし作品になると、筆を重ねるほどに表現は奔放になってゆき、古画学習の痕跡も豊かな学識も凌駕するかのようである。なお《大国大神神影》は、昭和3年の『故富岡鉄斎翁遺愛品虎屋黒川魁亭氏所蔵品入札目録』の図版4に掲載されるが、富岡家出品分を記録した入札品原簿には該当作品が見当たらないことから、おそらく黒川正弘旧蔵品であることは間違いないだろう。

《長方手付梅花図磁鉢》

器物類に鉄斎が絵付けをしたり詩書を書き付けたものを、一般に「鉄斎の器玩」と呼称する。作例は30歳代からあり、木

図11　長方手付梅花図磁鉢

図12　「魁星図」印(鉄斎下絵)

村コレクションに帰すのは主に80歳代の作になる。

鉄斎自身が「長方甕鉢」と箱書する《長方手付梅花図磁鉢》(86歳　図11)は、見込み中央に大きな花形を配し、それを囲むように八方に花枝が伸びる。柱頭と花弁に書された「管領春風第一枝(春風第一枝を管領す)」は、春風が吹いて百花に魁けて梅の第一枝がほころぶとほどなく春に支配されるとの意で、描かれた花が梅花であることを示している。胴部には「大正十年小春月　為黒川氏写八十有六叟鉄斎自題於魁星閣(花押)」と、大正10年10月に黒川氏のために描いたことが識される。この黒川氏とはいわずもがな黒川正弘のことで、百花の魁である梅花をもって正弘の号魁亭を表しているのである。魁亭は正弘の号であるとともに、鉄斎が大正11年に画室を新築した折に仮住まいとして提供された虎屋敷地内にある茶室の名でもあり、おそらく正弘の求めに応じて、鉄斎が愛好した魁星にちなむ号を命名したのだろう。魁星とは北斗七星の第一星のことを指し、中国では文運を主る星とみなされ、江戸時代には書物の見返しにさかんに魁星印が捺された。学問を守護する魁星の図、すなわち「魁」字が鬼偏に斗からなるので、鬼が斗を提げ北斗七星や百花の魁である梅花と組み合わされる図様を鉄斎は若い頃から好み、「魁星図」印(図12)を作って自身の作品に捺したり、

大正11年7月に落成した書庫も魁星閣と名づけている。

大正10年10月25・26日、今出川の桜橋財団において正弘の母黒川マサ喜寿御祝茶が催された。この祝宴は鉄斎の勧めによって開かれた茶会で、煎茶席には「掛物　富岡鉄斎先生筆西王母図」をはじめ、鉄斎と初代諏訪蘇山(1852～1922)の合作になる香爐、花瓶などが飾られ、別に設えられた展観席には竹内栖鳳、橋本関雪、内藤湖南、狩野君山、橋本独山ら京都を代表する46名の名士が揮毫した富士山に取材する書画が陳列されたことが会記からわかっている[11]。そのうち、茶具の一つである鉄斎筆・蘇山作「洗皿　春風第一枝」に該当するのが《長方手付梅花図磁鉢》である。大正6年に鉄斎とともに帝室技芸員を拝命し、以後親交を結んだ蘇山に宛てた書簡には「今回虎屋主人為其母堂祝意会執行ニ熱心　甚孝養之次第ニ付　高士ニ感其義当ニ御援助之義　愚拙迄満悦致し候　孰れ明日御面会御礼可申候」とあり[12]、正弘の母の茶会のために鉄斎自ら労をとったことが窺われるが、実に15点もの鉄斎と蘇山の合作が披露された。

《鵜図炉屏》《福禄寿書金欄手盃》《竹詩画器局　銘　瞑雲》

なお、この茶会記の茶具の第一にあがる「器局　鉄斎先生筆群仙祝寿図」は、昭和3年の『故富岡鉄斎翁遺愛品虎屋黒川魁亭氏所蔵品入札目録』にある図版139「鉄斎翁老松群仙絵桐木地器局」(図13)に該当すると考えられる。会記に制作者名はないが、入札目録には「菊斎作」とあり、この器局が指物師中島菊斎(1874～1935　屋号秋古堂)の作になることがしられる。当時、腕の如何にかかわらず生活に根ざした指物を生業とする職人は社会的地位が低く、御用務めや職家でもないかぎり茶会記に名を連ねることはなかった[13]。しかし鉄斎は菊斎の仕事

図13 「鉄斎翁老松群仙絵桐木地器局」
(『故富岡鉄斎翁遺愛品虎屋黒川魁亭氏所蔵品入札目録』より転写)

図14 鵜図炉屏

を高く評価し、名だたる名工や職家と同列に、その作品や箱書に「菊斎造」と明記して、70歳代末頃より最晩年まで合作を楽しんだ。

《鵜図炉屏》(85歳 図14)の共箱蓋裏には「大正九年七月祇園神事前日 秋古堂菊斎乞余画之 余不得罷拭汗而一揮塗抹返之 鉄斎八十又五叟」とあることから、菊斎が作った炉屏に乞われて鉄斎が筆を揮ったことがわかる。板部分表裏に渓流の流れと鮎をくわえる鵜が墨で描かれるが、一見奔放にみえる筆あとも立体物の特徴を捉え一気呵成に創出されたと考えると、鉄斎の構成力の確かさを見ることができる。一方、微に入り細に入り図示された菊斎宛の鉄斎書簡[14]からは、意を汲むことに長け、確かな腕をもつ菊斎に鉄斎は深い信頼を寄せていたことが知られる。

こうした名工職人との合作は互いの信頼関係のうえになる産物であり、異なる個性が織りなす調和は書画作品とは違ったおもしろさがある。前記のほかに鉄斎の合作者としては、陶工初代浅見五郎介、3代・4代・5代清水六兵衛、初代・2代三浦竹泉、4代・6代高橋道八、金工2代・3代秦蔵六、職家の釜

図15　福禄寿書金欄手盃

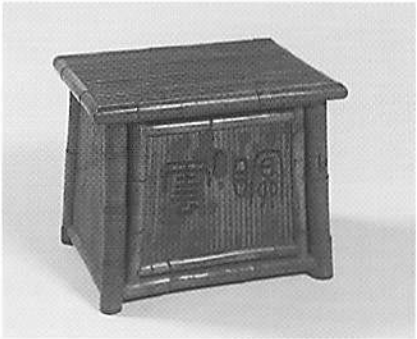


図16　竹詩画器局　銘　瞑雲

師大西清右衛門、竹細工・柄杓師黒田正玄、塗師中村宗哲などがあげられる。土風炉・焼物師永楽善五郎もそうした職家のひとつで、鉄斎は明治29年(1896)、南禅寺金地院においての12代和全追悼茶会に出席しており、生前の交際が窺われる。そして大正10年の作になる赤絵に金襴手で「福禄寿　八十六翁　鉄斎」と書す《福禄寿書金欄手盃》(86歳　図15)は、高台内に14代得全室妙全(1852～1927)が用いた「永楽」の窯印がある。法衣商に育ち、また若年の頃には大田垣蓮月の作陶の手伝いをしていた鉄斎にとって職人たちは身近な存在であり、長じてからは好んで様々な分野の名工職人と交流し合作を遺した。数代に亘る交流は長寿の鉄斎ならではあるが、代々技を継承する各家との具体的な交流については未だ研究が及んでいない。個別の事例については、合作そのものと附属の箱書、贈られた為書の作品、書簡、筆録等の周辺資料から今後検討を行ってゆく必要があるだろう。

ところで、器玩とは身辺に置いて日々賞玩し愛でる器物や工芸品のことをいうので、鉄斎の愛玩品も当然「鉄斎の器玩」に含まれる。鉄斎は蔵書のみならず、あらゆる持ち物に画や気に入った詩句、伝来、落款を入れる癖(へき)があり、《竹詩画器局　銘　瞑雲》(図16)には、嵌め込み式の蓋表に「瞑雲」の銘を入れ、

側面には竹図と「但有清風　鉄道人」としている。「入吾室者　但有清風(吾が室に入るは、但清風あるのみ)」は、鉄斎が好んで用いた句の一つで、その典拠は『南史』列伝第十・謝弘微にある一節である。この蓋裏に鉄斎は「画禅盒常用」とし、敬愛する明の文人董其昌(1555～1636)の室号画禅室にちなむ室号画禅盒を署して愛玩した。なお本品に備わる箱蓋裏には、前記の「鉄斎外史」印(図１)が捺されており、おそらく黒川正弘の旧蔵品ではないかと推察される。

《都三景図》

図17　都三景図
(右から鴨川暁景図　通天紅葉図　嵐山春暁図)

以上見てきたように、《虎僊育虎子図》《寄国祝歌》《長方手付梅花図磁鉢》《大国大神神影》および《竹詩画器局　銘　瞑雲》が黒川正弘の旧蔵品であることが明らかになったが(推測含む)、最後にもう一点を見てゆくことにしよう。

径13.1センチからなる円窓に京都の三景勝地を墨一色で瀟洒に描き、三幅対(図17、以下木村本)としたもので、右幅の題字に「鴨川暁景」、中幅に「通天紅葉」、左幅に「嵐山春暁」とする。円窓位置が右幅から順に斜めに上がっていく意匠は、こ

の画が特別な場に飾られたことを想起させる。しかし各幅には題字と落款、印章「鋏斎居士」があるのみで、それに伴う箱蓋裏には、件の「鉄斎外史」印と「黒川正弘」貼印、紙外箱の「魁」印が捺され正弘旧蔵品であることを伝えるほか、作品名も制作年も明らかにしない。

木村本と同じ三景を一紙に収めた《都三景図》(出光美術館蔵、以下出光本)という一幅がある。やや横長の方形紙に墨で円窓の枠を三方に配し、嵐山春暁図、鴨川暁景図、通天紅葉図の三図を墨筆で簡略に描いて、円窓枠外の画面左に「八十有九叟　鉄斎外史画」と三幅対と同じ「鋏斎居士」印を捺している。速筆の鉄斎は先に述べた《大国大神神影》のように、同じ画題を続けて描くことは珍しいことではなく、出光本と作風が同一であることを踏まえ、木村本の名称を《都三景図》、制作年は大正13年の鉄斎89歳の作としていいだろう。

さて出光本は、附属する札題から正弘の旧蔵品であるということがわかっており、『故富岡鉄斎翁遺愛品虎屋黒川魁亭氏所蔵品入札目録』の281「鉄斎翁都三景　小品　円窓」に該当すると思われる。木村本も正弘の旧蔵品であるので、二図とも鉄斎から正弘に贈られ、出光本は昭和3年の売立に出され、木村本は秘蔵されていたのではないだろうか。木村本は表具の意匠のみならず、中幅に売茶翁が茶を売った東福寺通天橋の景を置く構成から、大正13年6月15日の正弘主催の売茶翁記念茶会(於萬福寺)に用いられたのではないかと想像を逞しくしてしまう。そうであれば正弘にとっては自身が企画した鉄斎との最後茶会であり、手放し難い作品の一つであったろう。しかし、現在のところ茶会記が確認されていないので、あくまでも想像の域はでない。

さいごに

昭和13年、虎屋京都店は東京店に経営統合された。正弘は昭和11年12月に開設した名古屋店に精魂を傾けるが、その名古屋店も太平洋戦争の足音が迫りくる昭和15年、責任者である正弘の長男英雄が軍隊に召集されたのを機に閉店する。英雄は戦争から戻ってこられない場合を案じ、両親には黙って店をたたむことを決断したため、正弘は大変落胆したという。名古屋店は約4年に亘る営業に終止符を打ち撤退せざるをえなかったが、この間に正弘は鉄斎との想い出深い作品を託すことになる木村定三と出会いを果たした。この時定三は弱冠25歳[15]、正弘が兄13代光正から虎屋京都店を委ねられたのと同じ歳であった。そしてこの翌年、定三は熊谷守一と運命的な出会いをなし、美術品の蒐集にその人生を賭けることになる。

平成13年、3000点にもおよぶ木村定三コレクションが愛知県美術館に寄贈され、広く一般に公開された。最後まで正弘が手放し難かった鉄斎作品は、正弘が活路を見出した名古屋の地に今なお受け継がれ、コレクションの一角を彩っている。

なお本稿の虎屋および黒川家の記述については、株式会社虎屋と虎屋文庫からご指導を賜った。ここに記して謝意を表します。（文中敬称略）

［註］

（1）．筆者が行った講演内容を要約したものは、講演会報告「富岡鉄斎とその周辺」（機関誌『和菓子』第16号　株式会社虎屋　虎屋文庫　2009）に収録されている。

（2）．大正7年5月3日に催された帝室技芸員拝命祝賀会（於円山左阿弥）。

（3）．横川毅一郎「鉄斎翁生立ちの記」（『中央美術』第102号

1924)。

(4). 《書簡集》《書簡貼交屏風》(虎屋蔵)。

(5). 富岡とし子「父・鉄斎のこと」(富岡益太郎『鉄斎の思い出』鉄斎研究所　1973)。

(6). 出典は『詩経』大雅「文王有声」の「貽厥孫謀　以燕翼子」。

(7). 作品名称は鉄斎の題字および箱書を尊重した。

(8). 『鉄斎研究』第20号(鉄斎研究所　1975)の25。

(9). 『鉄斎研究』第50号(鉄斎研究所　1980)の21。

(10). 鉄斎は粉本《大黒天像》に次のように識している。「小田海仙画紺紙極彩色　大黒天之像有賛摩訶迦羅大自在天云々　鉄斎曰摩迦此譯大ト迦羅譯黒ト是梵号ニテ天竺之大黒也　本朝之大穴貴命トシ俗ニ大国神　国黒通音ニテ其実ハ別也　海仙ハ天竺之大黒モ日本ノ大国神モ同躰ト心得ルハ漢意ニ化セラレテ日本之真意ヲ不解ノ過チ也　此大黒之事空華談叢ト云四冊ノ書ニ摩訶迦羅天之ヲ詳ニ弁ス　其書中ニ旧事大成経ノ偽書ヲ引タルハ大過チ也　抑大国神ハ出雲大社ニ御鎮坐我大日本ニテ可敬祭ハ勿論古来ヨリ印土ノ大黒天ニ混合シテ曖昧トナリシハ仏者ノ姦策ニ出テシ也　余少年ノ時海仙此図ヲ示テ大ニ誇る後ニ其図ヲ観テ仙翁我国之事ニ疎ナリシ　今更気ノ毒千万ト思フ　我国人国典ニ暗キヨリ異邦ノ混淆ノ図夥シ(「富岡百錬」印)」。「此梵人ハ天竺風ニモ非固ヨリ皇国風ニ非　所謂支那風ナラン　何トモ奇異ナリ　別ニ印土ノ大黒天神経ト云小冊アリ　然レ共我邦人ハ必大国主大神ヲ可祭也」。「六角賣扇庵近購入」。

(11). 大正10年10月25・26日の黒川マサ喜寿御祝茶については一部「鉄斎の富士」(清荒神清澄寺鉄斎美術館『鉄斎美術館35周年特別展』図録　2010)において言及した。

(12). 野中浩俊「鐵齋の書美(十九)—諏訪蘇山宛書翰(3)—」(『書叢』第19号　新潟大学書道研究会　2005)に収録の第一巻第二通。

(13). この茶会記においても「鑵座　竹根　黒田正玄先生作」と職家の名はあがっている。

(14). 中島菊斎に宛てた鉄斎書簡19点は清荒神清澄寺蔵。

(15). 鉄斎研究では数え年を採用しているので、本稿においては木村定三の年齢もそれに従った。

正誤表

頁	行	誤	正
P31	写真キャプション	売茶翁記念茶会	売茶翁供養茶会 （平成23年11月に改名）
P31	5行目		
P46	22行目		
P45	写真	《都三景図》	《都三景図》
P45	図17 キャプション	図17 都三景図 （右幅から鴨川暁景図 通天紅葉図 嵐山春暁図）	図17 都三景図 （右幅から嵐山春暁図 通天紅葉図 鴨川暁景図）
P45	14～16行目	右幅の題字に「鴨川暁景」、中幅に「通天紅葉」、左幅に「嵐山春暁」とする。円窓位置が右幅から順に斜めに上がっていく意匠は、	右幅の題字に「嵐山春暁」、中幅に「通天紅葉」、左幅に「鴨川暁景」とする。円窓位置が右幅から順に斜めに下がっていく意匠は、